

「いのちの授業」をつくる



鈴木中人
玉置 崇

はじめに

「いのちの授業」をする あなたへ

玉置 崇

「いのちの授業」はやりづらいです。

いのちを「大切ではない」と言う子どもはいません。

しかし、大切だと思っていることを心底から大切なのだと思わせることこそ、じつはとても難しいのです。

「いのちの授業」とは、まさにいのちの大切さについて考える授業です。道徳や総合的な学習の時間に行われることが多いのではないのでしょうか。一方で、「いのちの授業」を行う大切さはわかっていても、子どもたちの心に響く授業をする自信がないという声をよく聞きます。かつて小・中学校に勤務していた経験から、この言葉にはとても納得できます。

かつて私が、「いのちの尊厳」をテーマに研究授業をしたときのことです。授業開始直後に、子ども

が「今日の道徳は、いのちを大切にしようことだな」とつぶやきました。それを聞いて、「いのち」について深く感じ入ることができると意気込んでいた私は、しゅんと気持ちが萎えてしまった思い出があります。

授業中に「かけがえないいのち」という言葉を発したり、振り返りに「一つしかないいのちを大切にしたい」などと書いたりした子どもはいました。しかし、授業検討会で「この言葉が意味するいのちの重みを、子どもたちはどれほどわかっているのでしょうか」と問われたとき、私は「こうしたことを書く子どもが一人でもいたことを評価していただけませんか」と苦し紛れに返すしかありませんでした。

ここで、典型的な「いのちの授業」を紹介し、先生方がやりづらいつ感じてもらえることを分析しておきます。

授業冒頭の発問では、授業のねらいに関連した事柄を尋ねたり、書かせたりします。

例えば、「ペットが亡くなり、悲しい思いをしたことはありませんか」「大災害でたくさんの方が亡くなりましたが、どのように思いますか」などです。授業テーマが「いのちの大切さ」であれば、どうしても初発問が、「死別体験」や「生死」に関わるものとなります。この段階で、すでに授業のゴールを察する子どももいます。私の失敗談がその一例です。

次の展開で、子どもたちが「いのちの大切さ」について考え、感じ入るための題材を読ませます。授業で扱う題材ですから、仮にいのちを粗末にした主人公の話であっても、行間から滲んでくるのは、やはり「いのちを大切にすることです。子どもたちの発言も、きれいごとになりがちです。中には、教師が望んでいる方向性を付度して発言する子どももいます。

話し合いの中、教師が子どもたちの心をゆさぶろうとしても、子どもたちの「いのち」に対する発言はほぼ正道ですので、なかなか難しいのです。教師が「いのちって、そんなに大切なものかなあ」などと反論することはできません。

そのため、授業のまとめはこれまでの発言をなぞるような展開になります。子どもたちの「いのちの大切さ」に対する思いは授業前とそれほど変化はしていないと感じつつ、授業を終了してしまうのが、「いのちの授業」の一般的な流れです。

鈴木中人さんに出会わなければ、私はおそらく現在も「いのちの授業」への距離感を持ったままでしょう。「いのちの授業」はこうすればいいのだと私の目を開いてくださったのが鈴木さんでした。

鈴木中人さんとの縁は、私が校長時代に「いのちの授業」の講演をお願いしたことから始まります。子どもたちのいじめや自殺が増えてきたというニュースが耳に入り、私は校長として何か手立てを講じたいと考えました。そこで、保護者も巻き込み、親子で鈴木さんの「いのちの大切さ」の講演を聴

く会を企画したのです。

今だから正直に言いますが、じつはあまり効果があるとは期待していませんでした。講演なので、鈴木さんが一方的に子どもたちに話をされるだけです。さらに、大規模校ですので、子どもたちは会場の市民会館大ホールの最後列までぎっしり座っています。舞台上の鈴木さんの表情もあまり見えないう位置で、講演を聞く子どももいます。最後まで静かにしていてくれたらいいと思います。

ところが、講演が始まってすぐに、私はとても失礼な考えをしていたと気づかされました。

鈴木さんは、わずか六歳で小児がんのために亡くなった娘さんの景子ちゃんの詳しい病状や、病室での両親や看護師さんとの会話を淡々と語られました。鈴木さんは、「我が娘はこんな大変な病気になってとても苦しんだのだよ。その辛さはわかりますか」などと、聞き手に身内の痛みを押し付けることはありませんでした。だからこそ、子どもたちは景子ちゃんのことを精一杯想像して聞き、景子ちゃんという一人の子どもの生き様から、「いのちの大切さ」を自分なりに感じ取っていると推し量ることができました。

そつと、保護者が講演を聞いておられる二階席に移動しました。何人もの方がハンカチで目頭を押さえておられました。親として子どもを失う苦しみや哀しみに共感するとともに、「子どもと自分は生きていく」ことをありがたい幸せとして実感しておられるように感じました。

講演の最後に、鈴木さんは「絶対に親よりも早く死んではいけない！」と、まさに魂の叫びを発せ

られました。そのとき、すべての子どもたち、保護者の体が硬直したように感じました。鈴木さんのメッセージを全身で受け止めたからこそ、です。

私は、鈴木さんの景子ちゃんへの想い、「いのちを大切にしてほしい」との心からの叫びが、聞き手にしっかりと伝わったと確信しました。そして、これは通り一遍の講演などではなく、まさに「いのちの授業」と呼ぶにふさわしいと感じました。

私は、この経験から、事実を伝え、子どもたち自身が感じ取ろうという気持ちを持たせることが「いのちの授業成功の極意」だと気づいたのです。

このように、鈴木さんの講演から、「いのちの授業」をするにあたって、大いに学ぶことがありました。子どもに「生きていることの喜び」「いのちの大切さ」を、自ら感じ取ろうとする気持ちを持たせること、それには、教師が一方的に思いを押し付けてはいけません。なぜ「いのちの授業」がやりづらいのか、それは「いのちの大切さ」を押し付けようとしたところにあるとわかったのです。

私にとって、鈴木さんとの出会いは、まさに衝撃的なものでした。鈴木さんの「いのちの授業」を全国の子どもたちに聞かせてやりたいと思いました。とはいえ、鈴木さんに全国三万校を超える小中学校へ行っていただくことはできません。

また、冷静に考えてみると、鈴木さんの「いのちの授業」は鈴木さんにしかできないものです。小児が克服に健気に向かっていった景子ちゃんのお父さんだからこそ、できる「授業」なのです。

だからといって、鈴木さんのような経験がない教師は「いのちの授業」をしなくてよいことにはありません。「いのちの授業」は、学校教育でもっとも必要とされているものの一つと言っても過言ではありません。私の周りにおいても、子どもたちの心に染み入る「いのちの授業」をしたい、という教師はたくさんいます。

こうしたことを前提として、本書はまず、「いのちの授業」とは何をどのように学ぶか＝根本の見方・考え方を考えます（第一章）。その上で、明日に向かって「いのちの授業」を広げていくために、子どもたちに伝えたい「いのちのメッセージ」（第二章）と、その授業づくりに役立つ実践ヒント（第三章）を提案していきます。次に、今、日々の学校現場で起こっている、教師が抱える「いのちの悩み」にも答えます（第四章）。

「いのちのメッセージ」（第二章）で鈴木さんが綴られた各テーマは、三ページ程度の読みきりです。関心のあるテーマを読み、自身をふり返ることで、きつとあなたの「いのちの授業」の手引書になってくれるでしょう。

私は、鈴木さんの知見を学校現場でさらに生かすために、「教師」の視点から「いのちの授業」に取り組む「考え方や心得」「実践ヒント」などを書かせていただきました。

— 目 次 —

はじめに 「いのちの授業」をするあなたへ 2

序 章 私の思い 13

第一章

「いのちの授業」とは、何を、どのように学ぶのか 19

様々な「いのちの授業」と出合い思うこと 20

「いのちの授業」では、何を学ぶのか 22

「いのちの授業」は、どのように学ぶのか 26

第二章

子どもたちに伝えたい「いのちのメッセージ」（話材集） 31

「愛されている」「いのち

① 君は、大きな愛に守られている 32

② 自分の「名前」を大切にすると 35



「限りある」いのち

- ③ 人は、生まれて、生きて、死んでいく 38
④ 今、このときを「生き抜く」 41

「かけがえない」いのち

- ⑤ ひとりの人間は、「尊い存在」なんだ 44
⑥ 「助けて！」と、叫んでいいんだよ 47
⑦ 絶対、親より早く死んではいけない！ 50

「つながっている」いのち

- ⑧ 優しさで、みんなの心はつながっていく 53
⑨ 君がいてくれるから、未来もつながっていく 56
⑩ 家族を大切にすることは、いのちを大切にすること 59

「生かされている」いのち

- ⑪ 大いなるものに生かされている 62
⑫ 「体のいのち」と「心のいのち」がある 65



「生きる力」

⑬「普通の生活」を大切にすると 68

⑭「当たり前前のこと」を、「当たり前前に」続ける 71

⑮もっと楽しい「明日がある」と信じる 74

⑯「だいじょうぶ？」と声にして伝える 77

⑰笑顔は、こだまする 80

⑱人生のテーマをもつ 83

⑲「いのちのボタン」を胸に生きる 86

⑳幸せは、自分の心が決める 89

いのちをみつめる意味 92

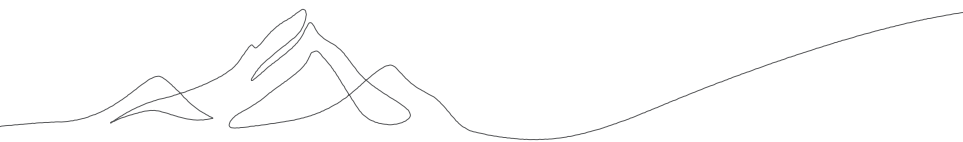
明日へ、「いのちの授業」づくりの実践ヒント 97

「いのちの授業」づくりの心得 98

子どもに伝えたい「いのちのメッセージ」(話材集)の活用方法 105

スクールリーダーへのメッセージ 109

「心の天気」で子どもたちの心をとらえる 115



今、「いのちの悩み」に答える

121

子どもとの向き合い方

① クラスには、愛された体験の薄い子もいます。どうしたらよいでしょうか。 122

② 孤独感を感じる子どもが増えており、心配しています。 125

③ 子どもの生活環境がどんどん変わっており、戸惑っています。 129

④ 「死ね」「消えろ」との言葉が溢れ、変わらない姿に空しくなります。 133

⑤ 「死にたい」と言う生徒に、どう向き合えばいいですか。 137

⑥ 校務、コロナ、オンライン……。忙しくて子どもの心の変化がつかめません。 141

授業づくり

⑦ 「いのち」は重いテーマに感じて、教えることを躊躇してしまいます。 144

⑧ 死を、子どもに話すことが不安です。大丈夫でしょうか。 147

⑨ 若い教師は、死の体験が少ない人もいます。死を教えられますか。 151

⑩ 中学生ともなれば、社会での「いのちの現実」を見透かしている。

その現実を、どう伝えたらいいでしょうか。 155

⑪ 祈る、手を合わせることは宗教との声があります。大丈夫ですか。 159

⑫ がん教育がはじまっていますが、どう進めるか模索しています。 163

⑬ 病気などの当事者の子どももいます。どう配慮すればいいですか。 167

⑭ 暗いニュースばかり。笑顔になる授業も必要ではないでしょうか。 172

学校経営

⑮ 現場は忙し過ぎて、「いのちの授業」をする余裕がありません。 176

⑯ 担任の頑張り任せでは「いのちの授業」には限界があります。

学校や地域全体で取り組みたい。 179

⑰ 自殺が起きたとき、どうすればいいでしょうか。 183



序章

私の思い

鈴木 中人

私は、全国の学校などで「いのちの授業」をしています。もう三十万人を超える方にご参加いただいています。

実は、元は普通の会社員でした。長女・景子（当時、小学一年生）を小児がんで亡くしました。子どもの死を意味あるものにしたたいと願い、会社を早期退職して「いのちの授業」を始めたのです。

私の「いのちの授業」は、六歳までの「いのち」を精いっぱい輝かせた「小児がんの少女と家族の姿」を通じて、いのち、家族、生死をみつめます。そして、本当に大切なこととは何か、どう生きるかを問いかける中で、生きる力を芽吹かせるものです。

授業は、「いのちの質問」からスタートします。

「小児がんの子どもは何人いるでしょうか?」「亡くなった人に触ったことがありますか?」「自殺で何人の方が亡くなっているでしょうか?」

「生きること、死ぬことは、別々なことではありません。死をみつめることは、生きる、いのちをみつめることになります。」

今から、小学生の女の子が、小児がんで死んでいく話をします。自分に問いかけてください。もしも自分だったらどうするか? 生きる、死ぬ、いのち、家族って何だろうか? その中で、たった一つ、あなたが大切にしたいことをみつめてください」

次に、「私の実体験」をありのままに話します。

初めて授かった子に、幸せになってほしいと願いを込めて、「景子」と命名しました。普通の家族（父・私、母・淳子、長女・景子、弟・康平）として暮らしていた三歳の夏。突然、景子が小児がんを発病。

入院前夜に「どうか病気が治りますように」と景子の寝顔に向かって手を合わせて祈りました。ある夜、「私、天国にいつちゃうの?」と景子が淳子に尋ねました。

景子は辛い治療にも、涙をこぼしながら「私、がんばったから」といつも言っていました。抗がん

剤治療として輸血を続ける中で、名前も知らないたくさんの人に支えられていることに気づきます。その後、病状は奇跡的に回復。定期的な抗がん剤治療をしながら、保育園にも笑顔いっぱい通園するまでになりました。

二年後、ついに治療終了のための精密検査を受診。全て異常なし。しかし、最後の検査で脳への転移が発見。余命を宣告されます。

「景子ちゃん、いっぱい頑張ったのに」と淳子が病院の廊下で涙を流しました。

「笑顔で天国に旅立つ日まで、輝きのある一日を届けてあげよう」と、私は淳子と誓いました。

保育園の生活発表会があった夜には、景子から「私が病気だから、ずっと病院にいくちゃいけないね。お母さん、ごめんね」と謝られました。

翌年の四月、小学校へ入学。

入学式の前夜、「こんな悲しい入学式はない」と、淳子がピカピカのランドセルの横で涙しました。病氣のために車いすの生活になっても、景子は「学校にいきたい、先生やお友だちに会いたい」と登校します。看護師さんの結婚式では「私も早くお嫁さんになりたい」と嬉しそうに夢を語り、自分の花嫁姿を絵に描きました。亡くなる直前まで、「先生が宿題やろうねと言っていたよ」とひらがな練習帳をベッドで書き続けていました。私たちは、景子は死んでしまう子ではなく、生き抜いている子だと教えてもらうことになりました。

夏の日、たった一人で天国に旅立ちます。

「お願い、もうやめて」とうなされる景子に、「もうがんばらなくていい、もういきなさい」と伝える、それが親として最後にできることでした。「殺した」と私には自責の念が溢れ、病院を出るとき、淳子は「景子ちゃんの体が冷たい。風邪をひくといけないからタオルケットかけて」と涙を流しながら言いました。

葬儀では純白のウエディングドレスを着せて、大好きだったお嫁さんにして家から送り出しました。二年十一か月闘病して、景子は小さな白い箱になって帰ってきました。

子どもを亡くす逆縁の悲嘆……。

最後に、「いのちのお願い」をします。

「生き抜く、支え合う、ありがとう、を大切にしてください」

「もし、あなたに万一のことがあったら、家族や仲間がどれほど涙を流すか。特に、お父さんお母さんは血の涙を流す。だから、どんなことがあっても、絶対、お父さんお母さんより早く死んではない！」

「今日、小さないのちの輝きをバトンタッチしました。それを、クラスや家に持ち帰って、少しでも大きくしてくれたら嬉しいです」

そのとき、子どもも大人も、自分なりに「いのち」を心に強く感じてくれます。

「いのちの授業」で訪問した学校は、もう千校を超えています。たくさん子どもたち、先生、家族と出会いました。さまざま「いのちの授業」の取組み、学校現場の現実も教えてもらいました。その姿や思いに、何度も何度も胸が熱くなりました。

今、切に願うことがあります。

今の時代にこそ、学校現場で「いのちの授業」をもっともっと広げてほしい。
私の体験が役立つのであれば、「いのちの授業」の小さなヒントにしてほしい。

その思いを込めて、この本を玉置先生とともに綴りました。

玉置先生は、まさに「学校の先生」の先生です。学校現場を熟知、確かな教師像、授業づくりの実践力、あったかい人間力、ベストセラー著者、落語達人……。「いのちの授業」をご一緒する中で、みんなの心をギュッとつかんで、大元氣と「いのちを育む」導きをもらっています。

二人が、泥臭く多面的に「いのちの授業」をみつめました。その対話と深掘りから、新たな提案、ヒント、気づきが生まれたのではないかと思います。

紹介するエピソードは、いのちの実話です。あなたは、たくさんの「いのちの物語」に出合います。「もしも自分なら、どうするだろうか」と問いかけてみてください。きっと、あなたの心を優しく確かなものにしてくれます。

心に深く響くものがあつた。

なるほど、そうか、やってみよう！

この本を読み終えたとき、そう感じてもらえれば幸いです。

さあ、みんな、「いのちの授業」をはじめましょう！